手を伸ばせば

中　二

「あっ！　危ない！」あっという間の出来事が、私の中の何かを動かしました。

その日、私はなかなか来ない電車を母と二人で待っていました。何気なく反対車線のホームを見ていたとき、私の視線の先に、白い杖を持ち、黄色い点字ブロック上を歩いている一人の男性の姿がありました。人が多く、ざわつくホームは、こんなときとても歩きにくくて、「大変なんだろうな……。」と思いながら、ふとその男性の進行方向に目を向けたときです。同じく点字ブロック上を歩く若い男性が目に飛び込んできました。その男性は、スマートフォンを手に持ち、操作に夢中で全く前を見ていません。そして、互いに気が付かないまま歩いています。

「あっ！　危ない！　ぶつかる！」私がそう思ったとき、白い杖の持ち主の男性は倒れそうになり、偶然横を通りかかった二人の女性に体を支えられていました。「はぁ……。」二人の女性のとっさの行動で、男性は転ばずに事無きを得ましたが、ぶつかってきた当の男性は何事もなかったかのようにその場を立ち去ってしまいました。ホームに転がった杖を気に留めることもせず……。私はホームに転がった白い杖を見ていたら、なんだか無性に腹が立ちました。「なんて自分勝手な行動だろう。目の不自由な人たちにとって、あの点字ブロックは歩く上での命綱なのに……。」横にいた母が、

「悲しいね。」

とぽつりと呟きました。母の視線の先は、立ち去った男性の方向でした。

あの日の出来事があってから、私は目の見えない世界に興味をもつようになりました。実際に、一日中、目を隠して、家の中で生活をしてみるということに挑戦してみました。見えない世界を少しでも体感することで、自分にどんなことができるのか、ということを考えてみようと思ったのです。しかし、実際それはとても大変で、想像以上に怖い世界でした。どこに何があるのか慣れた自分の家でさえ、壁を触れながらでなくては、全く動くことができませんでした。中でも特に怖いと

感じたのは、階段を下りるときでした。家の中でさえこのように感じるのに、これが一歩外に出たらどうなるのでしょうか。家の外は、つたう壁も手すりもありません。目の不自由な人たちは外を歩くとき、どれほど多くの緊張を強いられていることでしょう。私はあの日の光景を思い出し、胸が痛くなりました。しかし、この体験をしたことで、私にもできそうなことに何となく気が付くことができたと思います。

それは、「誰かがやる」の「誰か」を「自分」に置き換えて、何か行動をしてみることです。決して簡単なことではありません。とても勇気のいることでもあります。しかし私は、あの日、自分の中に芽生えた感情を忘れず、恐れずこの手を差し出せる人になりたいです。

手を伸ばせば、私にでも変えられる小さな未来はきっとあります。

私たち、一人一人の差し出す手の温もりが、明日のこの世界を変えていきます。